日本音楽集団

第9回定期演奏会

〔演奏〕 日本音楽集団

〔客演〕 岩本忠生・芝　祐靖

ENSEMBLE NIPPONIA

The 9th Regular Concert

June 10th 1969

6:30 p.m.

at ASAHISEIMEI HALL

── 曲目と出演者 ──

1. トルソ／広瀬量平

坂井とし子（箏）・白根きぬ子（箏）・野坂恵子（三絃）
宮田耕八朗（尺八）・**岩本忠生（チェロ・客演）**

2. 三つの断章／中能島欣一

宮本幸子（箏独奏）

3. 日本の楽器による＜コントラスト＞／堀　悦子

白根きぬ子（箏）・野坂恵子（箏）・宮本幸子（十七絃）・山田美喜子（琵琶）
杉浦弘和（三絃中棹）・坂井とし子（三絃太棹）・望月太八（能管，篠笛）
宮田耕八朗（尺八）・古賀将之（尺八）・横山勝也（尺八）・田村拓男（打楽器）
清水義矩（打楽器）・横山千秋（指揮）

（休　憩）

4. 四群のための形象／三木　稔

1）文様（あや）　野坂恵子（箏）・白根きぬ子（箏）・宮本幸子（十七絃）
2）居機（いき）　**芝　祐靖（竜笛・客演）**・望月太八（篠笛）・宮田耕八朗（尺八）・横山勝也（尺八）
3）曲（くせ）　杉浦弘和（三絃細棹）・山田美喜子（琵琶）・坂井とし子（三絃太棹）
4）擣（とう）　田村拓男（打楽器）・清水義矩（打楽器）

5. 三絃と日本楽器のためのディヴェロプメント／長沢勝俊

野坂恵子（箏）・坂井とし子（箏）・宮本幸子（十七絃）・山田美喜子（琵琶）
杉浦弘和（三絃）・望月太八（篠笛）・宮田耕八朗（尺八）・横山勝也（尺八）
田村拓男（打楽器）・清水義矩（打楽器）・横山千秋（指揮）

— PROGRAMME & PLAYERS —

1. TORSO／HIROSE, Ryohei

by SAKAI (Kt.) SHIRANE (Kt.) NOSAKA (Sg.)
MIYATA (Sh.) IWAMOTO, Tadao (V. Cello, Guest Player)

2. MITTSU NO DANSHO／NAKANOSHIMA, Kinichi

Three pieces for Koto
by MIYAMOTO (Kt. Solo)

3. ''CONTRAST" by Japanese Instruments／HORI, Etsuko

by SHIRANE (Kt.) NOSAKA (Kt.) MIYAMOTO (Js.) YAMADA (Bw.)
SUGIURA (Sg.) SAKAI (Sg.) MOCHIZUKI (Nk., Sb.)
MIYATA (Sh.) KOGA (Sh.) YOKOYAMA, K. (Sh.) TAMURA (Perc.)
SHIMIZU (Perc.) YOKOYAMA, C. (Cond.)

(Intermission)

4. Figures for Four Groups／ MIKI, Minoru

1) **A Y A** by NOSAKA (Kt.) SHIRANE (Kt.) MIYAMOTO (Js.)
2) **I K I** by SHIBA, Sukeyasu (RT., Guest Player)
MOCHIZUKI (Sb.) MIYATA (Sh.) YOKOYAMA, K. (Sh.)
3) **KUSE** by SUGIURA (Sg.) YAMADA (Bw.) SAKAI (Sg.)
4) **T O H** by TAMURA (Perc.) SHIMIZU (Perc.)

5. Divelopment for Sangen and Japanese Instruments／NAGASAWA, Katsutoshi

by NOSAKA (Kt.) SAKAI (Kt.) MIYAMOTO (Js.) YAMADA (Bw.)
SUGIURA (Sg.) MOCHIZUKI (Sb.) MIYATA (Sh.) YOKOYAMA, K. (Sh.)
TAMURA (Perc.) SHIMIZU (Perc.) YOKOYAMA, C. (Cond.)

Kt.=Koto	Js.=Jūshichigen	Bw.=Biwa	Sg.=Sangen
Rt.=Ryūteki	Nk.=Nōkan	Sb.=Shinobue	Sh.=Shakuhachi

トルソ

広瀬量平

6年前，この曲を作曲した頃，僕は芸大の専攻科を卒えたばかりだった。その少し前に「シンフォニーズ」(ラジオ関東芸術祭委嘱作品・指揮・岩城宏之）を書き，直後に「弦楽のファンタジー」（札幌交響楽団委嘱作品，岩城宏之指揮）があり，トルソはそれらの作品と作曲期間を夫々少しずつ重複している。そしてこれは，現在この日本音楽集団に発展合流された泉会の委嘱で作曲した。(1963年）いわゆる邦楽器のための僕の最初の作品であるが，この後，この集団の母胎となった尺八三重奏団の委嘱で「霹(へき)」を作曲し（1964年），僕の作品系列の中に邦楽器が入ってくるようになった。

今この曲のことを思い出してみると，僕は邦楽器の世界にある葛藤をもち込もうとしたのだと思う。楽器たちを争わせようという僕の願いにもかかわらず，この楽器たちは，互に馴れ親しんで，なかなか煽動にものらず，調和する音へ向おうとする。すると僕は，曲を進行する理由を失ったと感じ，そういう静止感，安定感をさけようとした。

当時僕は葛藤なしに持続はありえないと思っていたし，対立なしの討議や，合槌を打ちあうだけの会話は直ちにやめるべきだと強く思っていた。それ故，曲の時間的長さは，葛藤の大きさに正比例すべきだった。そしてこの曲は凡そ四・五分の曲三つという十数分の長さになった。第1曲は2面の箏と三絃，第2曲は三絃，尺八，チェロ，第3曲は全五つの楽器のためのものであるが，たとえば，第1曲で箏たちは静止したテンポを固持して停滞を欲し変化を好まないのだが，三絃はより速いテンポを欲して，たえず主導権を奪いあうところから，音楽的事件を展開させようとした。また第3曲ではチエロと尺八が共謀して，箏，三絃の安定した状況を攪乱しようとして確執をかもす。

しかし楽器達を争わせようとした僕の意図はそれ以上に僕と楽器達の親和力との戦いにもなった。この親和力は偉大である。異分子であるチェロまでも味方にして一つの中心音へ向わせようとし，完全五度の安定と調和へと傾斜してゆく。その時僕はこの日本という風土に遍在している地霊といおうか，神々といおうか，その土俗の力の大きさを思い知らされる。そしてそのことが，僕と日本の楽器とのアンヴィヴェレンツ——愛憎一体とでもいおうか——な関係を更に亢進させ，またまたその葛藤を楽譜に記録することになってしまうのである。

日本の楽器による＜コントラスト＞

堀　悦子

伝統的な日本の楽器の，大きい魅力の一つは，“個々の楽器の音色そのものが，それ自体で，すでに，ある音楽を充足している。” という点である。

このことについては，西洋の楽器に関しても，ある程度には同様であるが，伝統的な日本楽器の場合は，その程度の差における以上に，はるかに，根源的というか，ぎりぎりの音楽性の問題としていえることである。

○

西洋の楽器が，相関的に，しかも必然性をもってそこに育くんだ音楽の特性の一つに，“音の持続，運動，展開，” ということがあげられるとするならば，伝統的な日本の楽器と，その音楽における相関は，“単独の音だけでも，持続と運動と展開とを伴なった音群に劣らない音楽を顕在させる。” と いうことにある。しかも，そこには，‘‘音色と音空間との結合による，緊張と充実”。ということが底流する。

○

このたび，私が，伝統的な日本の楽器によって，この作品をかいたのは，日本の伝統的な楽器がもっている，独特な音の個性に対する憧憬と，そこから生まれるであろう音楽の伝統性を，超えてみたい。と，念願したにほかならない。

○

Ⅰ楽章においては，静的なもの，Ⅱ楽章では，動的なものを意図した。そしてその中で，多様な表現を試みた。

また，“静中動”。および，“動中静”。と，いうことも，当然ではあるが，意識計量した。

○

楽器編成は，能管←→しの笛，尺八（Re），

尺八←→二尺三寸（La），二尺三寸，三絃中棹，三絃太棹，琵琶，箏２面，十七絃，打楽器２人，の12人である。演奏所要，約18分。

解説にかえて

鞍掛昭二

トルソは私たちにとって，大きな魅力をそなえた作品である。その魅力のすべてについては，作曲者自身が別稿において，語りつくしておられるが，それにさらにつけ加えるならば，私たちのレパートリーの中に，この位の人数の編成の曲が数少ないということが，あげられる。このトルソのように，指揮者なしで数人が合奏する曲では，演奏者各人が統一された楽想をもちつつ，一方ではその各々の異なった役割を果す。また，出入りのきっかけや，テンポの変化などを，緊密な連帯感の下に狂いなく，あるいは意識的に狂わせて行なう……などの，演奏者にとっての大きなたのしみの，極限をきわめることができる。

およそ演奏家たるものは，演奏すること自体が，たのしみの最たるものであるが，それを演奏形体の上からみると，ソロの楽しみ，大合奏のたのしみにもまして，小人数の室内楽のたのしみが最大のものであろう。これにはいろいろの異論があるかもしれないが，とにかく多くのソリストや多くのオーケストラプレイヤーが，ほとんど身銭を切ってまで室内楽をやっいるのは，その具体的な証明であろう。

とにかく私たちは，今日また新たにこのたのしく魅力的な作品を，私たちのレパートリーに加えたことを，心から喜こんでいる。

三つの断章は昭和17年の作曲で，およそ箏の音楽に関心をもつ人なら，すべての人が知っている曲である。私は，この曲はもはや，箏の独奏曲の古典であると考えている。その理由は，この曲の作曲者が，すでに「箏曲」の流派を超えた巨きな存在であるのと同様に，その創造活動の所産である分身，三つの断章も，やはり流派を超えた「箏」の音楽であることが一つと，もう一つは「古典」の条件として私が考える独創性と，豊かな音楽性と，時代をこえた新鮮さとが，この曲にはあるからである。

私たちはまた，この曲をプログラムにとりあげることによって，集団の演奏団体としての姿勢を示したつもりである。演奏者は，独奏曲を演奏することによって，演奏者個人の資質，力量と対決しなければならないし，また，すでに定評ある作品を演奏することによって，集団も，演奏団体としての一つの評価を得ることになる。どちらにしても，このきびしさをくぐり抜けていかなければ，今後の集団の存在意義は失なわれるものと私たちは考えている。

この曲の三つの楽章は，題名どおり，たがいに関連した楽想を全くもたず，断絶している。

日本の楽器によるコントラストは，集団として初めての作曲委嘱である。堀悦子氏はフレッシュな人材として，すでに以前から私たちの委嘱候補にのぼっており，このたび快諾を頂いて，この記念すべき作品が誕生した。

作品委嘱は私たちのかねてからの懸案事項であった。集団のメンバーとして３人の作曲家がいるが，この人たちはメンバー以外の作曲家に対して本来何のセクショナリズムをももっていないし，私たちもこの３人の作曲家を，心を一つにする同志とは思っても，たがいにそのために拘束しあう気持ちは少しもない。私たちはただ，日本の楽器のために作曲するという，すでに先覚者があり，またこの３人の作曲家も努力して切り拓いてきた道を，さらに多くの作曲家とともに歩みたいとねがうのみである。

四群のための形象は，すでに三群のための形象として作曲された，居機，文様，擣に，さらに一群，曲（くせ）が追加され，文様，居機，曲，擣の順に並べかえられて，四群として完成されたものである。管楽器，打楽器，および二つの発音形体の全く異なる撥絃楽器，あわせて四つのグループのための作品で，それぞれの楽器群のもつ特徴を様式化して，あたかも小さな交響曲のように継起する。

三絃と日本楽器のためのディヴェロプメントは，三絃と他の楽器群とが一体となって楽想が展開される，ユニークなコンチェルトである。細，

中，太と三種ある三絃のうち，地唄三味線である中棹をはずし，対照の明らかな，派手な個性をもつ細，太の二種の三絃によって三つの楽章が対照される。第1章は細棹，第2章は細棹の撥を変えたもの，第3章は太棹が用いられる。撥を変えることにより，驚くほど音色が変わってくる。

この曲は，一昨年の第6回定期につぐ再演であるが，四群のための形象も，形をかえての再演ということができる。

音楽作品の再演（三演，四演，……）は，その作品に真の生命と価値を与えるための唯一絶対の手段である。再演なくして作品の生命は保ちえない。ところが今の日本の音楽界では，初演だけで打ちすてられてしまう作品の数がたいへん多い。安易な創造は排泄と異ならない。こういう事態は，作曲家も，演奏家も，企画・製作者も，聴衆も，それにたずさわる人々すべての共同責任である。私たち集団も，創作と演奏を両輪とする団体として，再演を一つの大きな使命として考え，実行していきたいと願っている。

べらんめえで失礼いたします

宮田　耕八朗

エー毎度バカバカしいおはなしで……という，まえおきで始まる落語でも，それ相当の知識がなければとても理解できません。

「寿限無」なんてエ　むずかしい名前は浅学の私などは，いまだにおぼえられませんが，それでも，けっこう面白いんですから，まあわかったことにしておきましょうか。

「浮世床」で，太閤記を立板に水ならぬ横板にとりもちのごとく読み始めた我らのクマさん「1尺2寸の大太刀を……」と言いかけると，まわりからイチャモンをつけられますが，これを理解するには，少なくとも1尺2寸という長さ，それから大太刀というものが，ともかく，脇差やあいくちとか登山ナイフのたぐいでないことぐらいは知ってなければなりません。そのくらいは……とおっしゃるあなた，でも考えてみて下さい。あなたの弟さんとか，子供さんだったらわかるかしら。

さて，このところ，箏や尺八の愛好者が日ましに増え，なんでも，ブームとかいうんだそうで，ウームそうかなとも思うんですが，まだまだこの日本の楽器をめずらしいと思ってる日本人もずいぶん多いようで，明治以来の学校教育から，日本の伝統音楽と楽器をしめ出してからというもの，日本人が何百年もうたいついで来たり，歴史の中でつくりあげて来た，わらべ唄や民謡さえも，子供達にとってはめずらしいものになってしまいました。

ですから，このめずらしい日本の楽器で，新しい日本の音楽を発表した場合，わからないといわれたり，無視されたりもしますが，なかには，やはり，めずらしいせいか，驚異の眼をみはって，おおげさにほめちゃう人もあります。

すると，そういうオッチョコチョイの人をあてにして，めずらしさに寄りかかった内容のとぼしい，ハッタリだけの作品を発表して，とくとくとして居る人が出て来たりします。しかし，そのへんの区別は私達にもむずかしく，いつか歴史が審判してくれるでしょう。ともかくも私達は創り，演奏を続けます。

ここで，聴衆のみなさんにお願いします。どうぞ，ご意見ご批判をお寄せ下さい。私達の活動に客席から参加していただきたい。日本の音楽を育て，歴史をつくるのはみなさんです。なんだか話が大きくなってきそうですね。でも私は本当にそう思うんです。どうぞよろしく。

日本音楽集団

(箏・三　絃)	坂井とし子	(尺　八)	古賀将之
(　箏　)	白根きぬ子	(打楽器)	田村拓男
(箏・三　絃)	野坂恵子	(打楽器)	清水義矩
(箏・十七絃)	宮本幸子	(指　揮)	横山千秋
(琵　琶)	山田美喜子	(作　曲)	長沢勝俊
(三　絃)	杉浦弘和	(作　曲)	三木　稔
(篠笛・能管)	望月太八	(作　曲)	元橋康男
(尺　八)	横山勝也	(コンサートディレクター)	鞍掛昭二
(尺　八)	宮田耕八朗	ゲストメンバー(竜笛)	芝　祐靖

お知らせ

◉ アンケート用紙をプログラムにはさみました。どうぞよろしくお願いいたします。

◉ 作曲家の協力をえて，野坂恵子は二十絃の箏を試作，実験中です。リサイタル（別記）には新曲によってその成果を発表する予定です。

◉ 次の定期会員募集は，第10回・第11回の２回分で，９月以降に行ないます。
（第11回の日時未定のため）御希望の方は会場受付で，仮予約を御受け致します。

◉ これからの活動予定

6 月11日（明日） 森の会第10回演奏会で三木稔作曲「箏・譚詩集」が野坂恵子のSoloで初演されます。6.30p.m. 朝日生命ホール

7 月5日（土） 「現代の日本音楽」公開録音　6：30p.m. NHK ホール
（曲目）エクリプス／武　満　徹
四群のための形象／三　木　稔
委嘱作品／誠　井　誠
〃　／斎　藤　鍵　ほか
（出演）日本音楽集団ほか

〃　NHK—FM放送「現代の日本音楽」11：00〜11：35 p.m.
（曲目）日本音楽集団第９回定期演奏会より

7 月8日（火） 横山勝也リサイタル　7：00 p.m.　東京文化会館小ホール

10月10日（金） 待望のレコードがコロムビアから発売。「現代日本の音楽３」として
（曲目）古代舞曲によるパラフレーズ／三木
尺八三重奏曲／清瀬保二
（レコード番号）OS—10052

10月31日（金） 朝日生命ホールで第10回定期演奏会　6：30 p.m.
（曲目）弦と日本楽器のための協奏曲／三木
尺八独奏曲／長沢
委嘱作品／佐藤敏直　ほか

11月7日（金） 野坂恵子第２回リサイタル　7：00 p.m.　日経ホール

日本音楽集団第9回定期演奏会・1969年6月10日（火）午後6時30分開演

新宿西口　朝日生命ホール

マネージメント　東京演奏家協会　渋谷区恵比寿 4—4—5 電話（473）4413

日本音楽集団　渋谷区神宮前 3—6—14 電話（402）0709